

I 学習活動を構想するワークショップ研修

妙高市教育委員会 濁川 明男

1. ワークショップ研修の意義

総合的な学習の時間のテーマが決定して、年間カリキュラム構想を立案する上で頭を悩ますことは、そのテーマの下でどのような魅力ある学習活動が構想できるかである。

次年度の担当学年が発表になって4月から実践に踏み出すとすれば、ほぼ半月の間に構想を練らねばならず、つい前年度のものを踏襲し持ち味が出せないという声が聞かれる。

人によっては、「総合的な学習の学習活動の構想は、授業者自身の経験と知見の範囲にとどまる」と指摘されるほどに、この構想立案段階で教師の創意がその後の総合的な学習の質を左右する。当然、教師として万能ではなく、自らの専門を超えた横断的、総合的な発想は容易には生まれない。それをカバーするのが学年や校内研修でのワークショップである。

ワークショップは協働してよりよい学習活動の構想を練り上げる取組で、経験を積むことでより充実した構想が生み出せる。

2. 学習構想を立案するワークショップの進め方

準備：ポストイット（一人20枚程度）、模造紙、マジック、マグネット

- (1) 本日のテーマは次のように設定し、希望するテーマ別にグループを編成する。1グループ6～8名程度が理想的である。

本日のテーマ

○米づくりから広がる総合 ○大豆から広がる総合 ○竹から広がる総合

- (2) 各グループごとにチーフを決め、チーフはワークショップの進行役を努める。
- (3) 15分でもまず、一人一人がそのテーマで考えられる有意義な学習活動をポストイットにできるだけ多く書き込んでいく。

例：有名米のきき味大会

- (4) 模造紙を中心にグループごとにポストイットを持ち寄って円陣となる。
- (5) 模造紙の中央にマジックで、米づくりとか、米から広がる総合等のタイトルを書き込む。
- (6) 45分間をめぐり、順に発表しながらポストイットを貼り付けていき、同じ活動はポストイットを同時に重ねていく。
- (7) 全員が貼り付けたところで、似た内容をグルーピングしていき、活動ジャンルにタイトルを考えてマジックで書き、その下にポストイットの内容を箇条書きにする。ジャンルごとに色を変えると良い。

例：

森のはたらき

土壌の水の保水力を調べる
・土壌の水の浄化力を調べる

- (8) 本来は、完成した活動構想マップをパソコンで打ち込みながら整理し、見やすい活動構想マップに仕上げ、参画した全職員に配布する（今回は省略）。
- (9) グループごとにできた活動構想マップについて発表する。各グループ5分

3. 学年会や校内研修でのワークショップ

総合的な学習の充実か否かが教師の双肩にかかっていること、保護者への説明責任があることを考えると、担任まかせであってはならない。年度末に次年度の学年別テーマが決まったら、テーマ別にワークショップを行って全職員の英知を結集して補完し、共有し合うことが大切となる。

4. 活動構想マップの活用

- (1) 活動構想マップのすべてが学習として使用できるものではない。児童の発達段階、直接体験が可能なもの、ねらいとのかかわりで有意義なもの、追究課題に連動するもの等の視点から、抽出して単元構成に生かしていく。
- (2) パソコンに取り込んでおれば常に引き出せるし、経験を積むと更により活動アイデアが生まれるので、バージョンアップしていくことで貴重な財産となる。

補講

事象とかかわる上での大切な3つの視点

例えば、河川をテーマとした総合において、身近な河川に繰り返し出向いても、ねらいに迫る問題意識は芽生えてこない。生活経験の狭い児童らにとっては、いつも見る河川が河川のすべてであるからである。テーマによっても異なるが、次の3つの視点からの事象の比較はきわめて大切と考える。

①空間的な事象と比較

学校の横を流れる青田川を繰り返し見てきた児童は、上流である青田地区の青田川で水質調べや水温、透明度、水生昆虫採取、魚の捕獲、水遊びを体験することで、上流と下流ではまったく河川相が異なることを実感する。たった 15 km に満たない川なのに下流ではヘドロ状の藍藻がたなびき、悪臭を放つ環境との対比が問題意識につながっていった。

このような事象との比較は、米作りにおいては平田と棚田の比較などが考えられる、

②対照的な事象との比較

青田川は護岸整備も進み、遊歩道には花壇、ベンチ、桜並木等が設けられている。当初の児童は、青田川の素晴らしさを書き綴っていた。そこで教師は自然に優しい川への思いや願いを膨らませたいと考え、水辺に草が生い茂り、深みと浅瀬の変化の激しい大瀬川と青田川での雑魚捕りを比較体験させた。大瀬川は児童の胸までくる深みがあり、そこで児童らは、ドジョウやフナ、モクズガニ、ウグイ、コイ、ライギョ等を次々と捕獲した。一方、テーマである青田川では、シマドジョウ、カマツカの数匹の魚しか捕獲できなかった。その経験によって、「人に優しいだけでよいのか。」「もっと魚が泳ぐ自然に優しい川が必要でないか。」という問題意識が芽生え、青田川の将来を考える土台となっていた。このような事象との比較は、米作りにおいては無農薬栽培との比較、竹においては、整備された竹林と荒廃した竹林との比較観察などが考えられる。

③時間軸での事象との比較

「温故知新」ではないが、「一昔前の人の生活と河川のかかわり」を調べることで、洗濯や風呂水、野菜洗い、米とぎ、水浴び、牛馬洗い、タンパク源としての淡水魚の捕獲など、河川が人々の生活空間の一部であった当時の生活実態を知ることにつながる。そこに現在の人々と疎遠になった河川への疑問が生まれてくる。米づくりでは、曲線の田園風景、豊かな水田生物、農村の地域コミュニティ、藁を中心とした循環型社会と現在との比較が生まれてくる。また、竹では昔の生活の中における竹の活用と現代との比較によって、なぜ竹文化が衰退していったのかという問題意識が芽生える。